

基調講演 障害者スポーツからのメッセージ

～太陽の家37年の歩みを通して～

社会福祉法人太陽の家 事務局長 吉永 栄治

1. 太陽の家の創立と社会背景（1965年）

太陽の家を創設したのは、当時国立別府病院の整形外科医長だった故中村裕博士である。博士は1960年にイギリスの国立脊髄損傷センターを訪問、受傷後半年で85%の者が社会に復帰していく姿に強い衝撃を受けた。当時の日本において、脊髄損傷者は終身病院か自宅でのベット上生活が大半で、街に出る事さえまならぬ状況であった。

そこでのリハビリテーションの中心がスポーツであったことから、帰国後直ちに障害者スポーツの普及に着手し、1961年の第1回大分県身体障害者体育大会（日本初の本格的な障害者スポーツ大会と言われている）、1964年の東京パラリンピックを経て、太陽の家創設への道を走り始める。そして1965年10月5日、大分県別府市に太陽の家が産声を上げた。

2. 「保護より機会を！」

「障害者自身が社会のあり方を嘆き自らに甘えたならば、何事も成就しない」中村博士は、仕事を求めて集まってきた多くの障害者に対して、欧米の進んだ福祉について切々と語り、叱咤激励した。その結果、1972年には日本で最初の福祉工場も誕生、その後多くの企業の協力を得て障害者の社会参加への道は大きく拓けていった。また、太陽の家では日々仕事に励む一方、創設間もなく体育館とプールが造られ積極的にスポーツ活動を実践してきた。その結果、現在約1200名の障害者が働き、スポーツを楽しむ余暇活動を満喫している。

3. スポーツ大会の成果

太陽の家が創設されて10年後の1975年、大分市・別府市において「第1回フェスピック（極東南太平洋障害者スポーツ大会）が開催された。それまでの国際的なスポーツ大会は車椅子使用者に限られていたが、フェスピック大会は障害種別の枠を越えた世界で最初の大会となった。

また、1981年の国際障害者年には第1回大分国際車いすマラソン大会を開催、今年で22回を迎えた。車椅子単独のレースとしては世界最初のものであり、世界最大の大会である。

障害者スポーツの父と呼ばれるグッドマン博士は、「失われたものを数えるな、残されたものを最大限に生かせ」と障害者に訴えたが、中村博士は太陽の家設立によって師を越え、多くの有能なスポーツ選手や立派な社会人を排出してきた。大分県では障害を持った会社の経営者や世界的なスポーツマンが、新聞記事になったりテレビに出演することも珍しい事ではなくなった。

「スポーツを愛好すること、それは障害者が社会参加するための最高の早道である」